

横浜市インフルエンザ流行情報 7 号

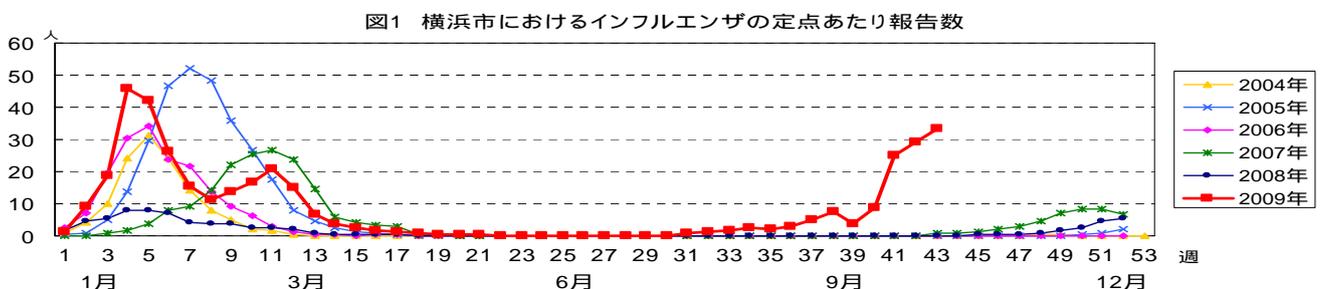
横浜市健康福祉局健康安全課 / 横浜市衛生研究所

トピックス 市内のインフルエンザ流行は警報レベルの高さです。

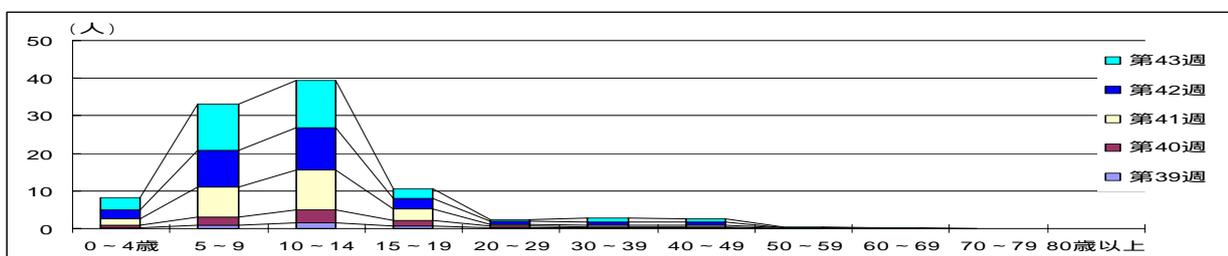
オセルタミビル耐性ウイルスが市内で初めて確認されました。

- 市内流行状況につきましては、第 32 週(8月3日からの週)から、流行の目安となる定点あたりの報告数1を超え、第 41 週(10月5日からの週)に注意報の 10 を超え、第 43 週(10月19日からの週)には 33.31 と、警報レベルの 30 を超え、平成 18 年の季節性インフルエンザのピーク 34.20 に迫る勢いです(図1)。
- 学級閉鎖等施設閉鎖の数は、第 42 週で 239 施設で対象患者 5513 人でしたが、第 43 週では 321 施設ですが、対象患者は 4666 人とやや減少しています。流行カーブが今後鈍化していくか注意が必要です。
- 第 43 週の迅速診断キットでは、A 型が 3766 件、B 型が 8 件、A 型 B 型とも陽性が 2 件でした。
- 病原体検出状況では、第 36 週(8月31日からの週)から第 40 週(9月28日からの週)までのインフルエンザ(疑い含む)とされた 30 検体について、23 検体に A/H1pdm が検出されています。1 検体には hMPV(PCR)が検出され、残り 6 検体については現在培養中です。今のところ季節性インフルエンザについては検出されていません。
- オセルタミビル耐性を示唆する遺伝子変異(H275Y)が確認されました。275 株調査し1株に見られました(0.4%)。オセルタミビルに感受性を持つ季節性インフルエンザ H1N1 に比べると 310 倍くらい感受性が低下していました(IC50 31.1nM)。ザナミビルへの感受性は保持していました。
- また今までに解析した 29 株すべてに、アマンタジン耐性を示唆する遺伝子変異(S31N)が見られています。
- 7 月以降の病原体検出状況は、すべて A/H1pdm であり、季節性インフルエンザは認められていません。
- 医療機関従事者を筆頭に、国の示した優先順位に則り、市内でも新型インフルエンザのワクチン接種が始まりました。
- 過去 5 週分の年齢層別集計報告の集計では、20 歳以下に多く感染が報告されています。高齢者には、今のところあまり感染の報告が見られていません(図2)。
- 行政区別では、瀬谷区 68.29、泉区 54.14、都筑区 52.80、緑区 47.40、港南区 39.13、港北区 38.00、磯子区 33.14、青葉区 32.82、旭区 32.30、戸塚 30.70 と 10 区が流行の警報の基準である 30 を超えました。流行の注意報の基準である 10 を超えていないのは、中区の 8.71 のみでした(図3)。
- 今後、ワクチンの計画的接種と、ウイルスの薬剤耐性や重症化等病原性の変化に対してのますますの監視が必要です。

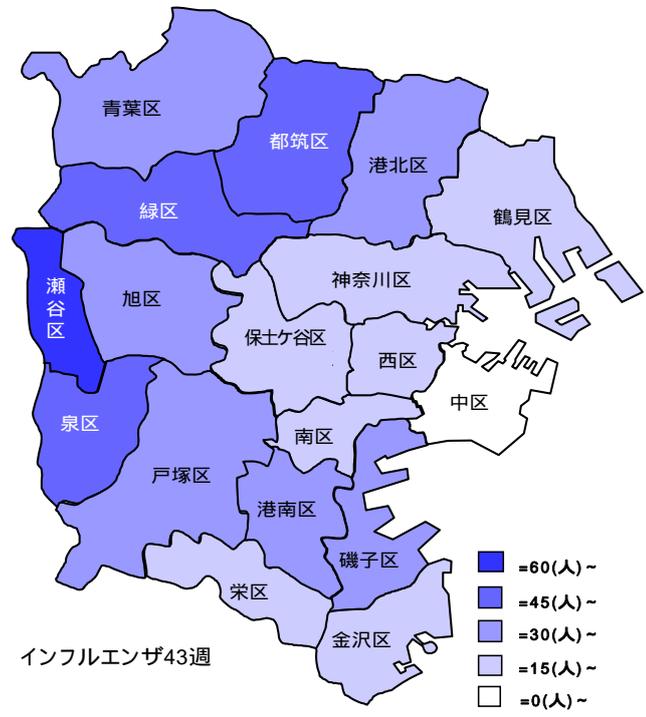
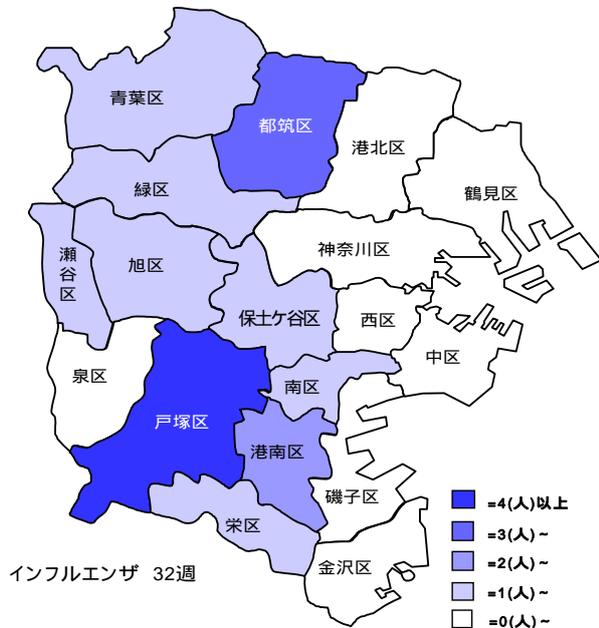
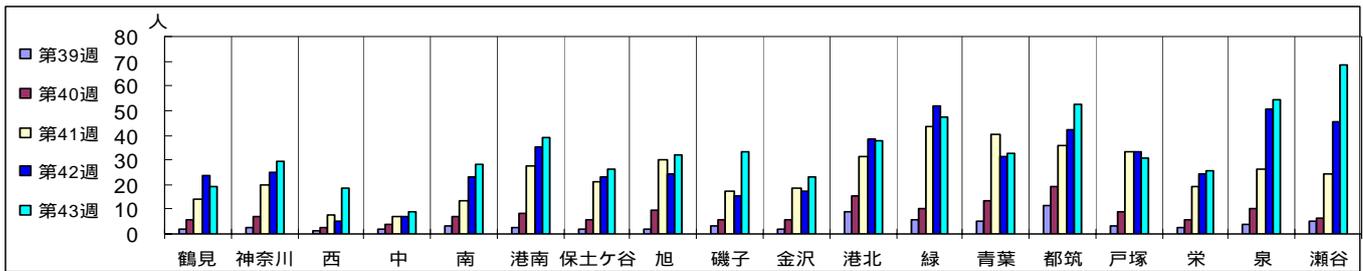
1 市内 145 か所(小児科 88 か所)の定点医療機関からの報告(図1)



2 年齢層別5週集計(図2)



3 行政区別情報(図3)



市内の状況については <http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/surveillance/report.html>
 全国の状況については、 <http://idsc.nih.gov/jp/disease/influenza/>
 全国の集団かぜの状況については、 <http://idsc.nih.gov/jp/idwr/kanja/infreport/report.html> をご参考下さい